第２部　夫餘族崇神の建国

第１章　崇神天皇と宗教

1　崇神天皇と異宗教

(1) 疫病の流行

崇神天皇の世に疫病が蔓延する。

> 此の天皇の御世に、役病多く起こり、人民は死に盡（つ）きむとす。
> 『記』

疫病がはやり、人民は死滅しそうになったという。『紀』も次のように書いている。

> 五年、国内に疾疫多く、民は死亡する者有り、且つ大半になりぬ。
> 六年、百姓は流離す。或いは背叛（はいはん）する者有り。其の勢いは徳を以てしても之を治めることが難しい。　『紀』

国内に疫病が流行して国民の大半は死去したという。「百姓は土地を捨てて逃げていく」、「或いは背反する者有り」とある。天皇に背反している。異常事態である。『紀』は何故、このような天皇に不名誉な記事を載せているのであろうか。人民が天皇に背反するという記事は崇神紀だけである。

(2) 異宗教

『紀』は続けて次のように書いている。

是以、晨興夕惕、請罪神祇。
（訳）是れを以て、晨（つと）に興き、夕までに惕（おそ）りて、罪を神祇に請う。　『紀』

天皇は朝から晩まで神々に罪を請うたとある。『紀』はさらに次のように書いている。

先是、天照大神・倭大国魂二神、並祭於天皇大殿之内。然畏其神勢、共住不安。　『紀』
（訳）是れより先、天照大神と倭（やまと）大国魂の二神を天皇の大殿の内に並べて祭る。然るに其の神の勢いに畏れて、共に住むに安からず。

崇神天皇は天照大神と倭大国魂神を大殿の中に祭ったが、一緒に居るのが「不安」であったという。何故、崇神天皇は天照大神や大国魂神と共に居ると「心が安まらない」のであろうか。

さらに続けて次のように書いている。

故、天照大神を以て、豊鍬入姫命（とよすきいりひめ）に託し、倭（やまと）の笠縫邑に祭る。仍（よ）りて磯堅城（しかたき）の神籬（ひもろぎ）を立てる。
亦、日本（やまと）大国魂神を以て、渟名城入姫命（ぬなきいりひめ）に託し、祭らしむ。然るに渟名城入姫命は髪は落ち、体は痩せ、祭ることができなかった。　『紀』

崇神天皇は「心が安まらない」ので、二神を大殿から外へ出すことにした。天照大神を豊鍬入姫命に祭らせ、大国魂神は渟名城入姫命に祭らせた。ところ

が淳名城入姫命は髪は落ち、体は痩せ、祭ることができなかったという。大国魂神を祭るのが苦痛だったのである。

淳名城入姫命は何故、大国魂神を祭るのが苦痛だったのであろうか。淳名城入姫命にとって大国魂神は自分が信じる神ではなかったからであろう。異宗教の神を無理矢理に祭るように強要されたのである。そのため髪は落ち、体は痩せたのであろう。

崇神天皇は天照大神や大国魂神と殿内に一緒に居るのが「心安まらず」である。崇神天皇にとっても天照大神や大国魂神は異宗教の神なのであろう。崇神天皇や淳名城入姫命にとって天照大神や大国魂神は自分たちの祭る本来の神ではなかったのである。

2　崇神天皇の改宗

(1) 大田田根子

疫病が流行して人民が死滅しそうになったので崇神天皇は愁い嘆いていると夢に大物主大神が現れる。

> 意富多多泥古（おおたたねこ）を以て、我が御前を祭らしめれば神気は起こらず。国は安らぎ平らぐであろう。　『記』

夢の中で、大物主大神は「意富多多泥古に私を祭らせよ」と語る。崇神天皇は四方に意富多多泥古を探し、河内の美努村（みぬむら）に意富多多泥古を見つけて神主とし、御諸山（みもろやま）に意富美和（おおみわ）の大神を祭らせる。これにより疫病は止み、国家は安らぎ平らかになったという。

『紀』にも次のように書いている。

> 天皇、乃ち神浅茅原（あさじはら）に幸（いでま）して八十萬（やそよろず）の神に会い、卜を以て之を問う。是時、神明が倭途々日百襲姫命（やまととととひももそひめ）に憑（かか）りて曰く、「天皇、何ぞ国の治まらざるを憂うや。若（も）し能（よ）く我を敬い祭らば必ず自ら平らぎなむ」という。天皇問いて曰く、「この如く教えるのは誰（いずれ）の神ぞ」。答えて曰く、「我は是、倭国の域内に居る所の神、名は大物主神なり」と。時に神の語を得て、教えの随（まにま）に祭祀する。然るに猶、験（しるし）無し。『紀』

倭途々日百襲姫命は神懸かりして崇神天皇に「大物主神を祭れ」という。崇神天皇は教えられたとおりに大物主大神を祭祀するが効果がない。悩んでいると一人の貴人が夢に現れる。

> 自ら大物主神と称して曰く、「天皇、また愁（うれ）うることなかれ。国の治まらないのは是れ吾が意なり。若（も）し吾が子の大田田根子を以て吾を祭らせたまわば則ちたちどころに平らぎなむ。また海外の国有り。自ら帰伏するであろう」という。　　『紀』

大田田根子は『記』の意富多多泥古（おおたたねこ）である。『記』と同じように大田田根子に大物主神を祭らせている。

崇神天皇は大物主大神を祭る方法を知らなかったのであろう。そのため教えられたとおりに大物主大神を祭ったが効果がなかった。そこで大田田根子を探して大物主大神を祭らせた。

崇神天皇にとって大物主神は祭ったことのない異宗教の神なのであろう。

(2) 他神とは

『紀』は続けて次のように書いている。

> 物部連の祖の伊香色雄（いかがしこお）を神班者と為すことをトうに之を吉（よ）しとす。また便（たよ）りに他神を祭ることをトうに「不吉（よからず）」。（中略）
> 大田田根子を以て大物主大神を祭る主と為す。また長尾市（ながおち）を以て倭大国魂神を祭る主と為す。然る後、他神を祭ることをトうに「吉（よし）」。便（すなわ）ち別に八十萬の群神を祭る。仍（よ）りて天社・国社、及び神地・神戸を定める。ここに於いて、国内は漸く謐（しずま）る。五穀は成り、百姓は饒（にぎわ）う。『紀』

崇神天皇は「他神」を祭ってもよいかと占う。ところが最初は「不吉（よからず）」と出る。そこで大田田根子を大物主大神を祭る主とし、長尾市を倭大国魂神を祭る主と定めて、再度「他神」を祭ってもよいかを占うと今度は「吉（よし）」と出る。

大物主神や倭大国魂神を祭ることにした後であれば「他神」を祭ってもよいという。「他神」とは大物主神や倭大国魂神以外の神である。崇神天皇や淳名城入姫命は「他神」を信じる人であることがわかる。

大物主神・倭大国魂神・天照大神は日本古来の神である。崇神天皇や淳名城入姫命はこれらの日本古来の神を祭らない、「他神」を信じる人である。崇神天皇や淳名城入姫命は古来から日本列島に住んでいたのではなく、渡来人であろう。

(3) 改宗

崇神天皇は「他神」（自分たちの神）を祭りたいために日本古来の神を祭ることにした。これは表面的な改宗であろう。その結果、「国内は漸く謐（しずま）る。五穀は成り、百姓は饒う。」とある。崇神天皇が日本古来の神を祭るようになったので背反していた人民も安心してようやく働くようになったのである。表面的な改宗ではあるがそれでも人民は納得している。

崇神天皇の改宗が表面的であったことは垂仁紀に書かれている。

> 先皇の御間城（みまき）天皇は神祇を祭祀するとはいえども、微細には未だ其の源根を探（さぐ）りたまわず。粗（おろそか）に枝葉に留まる。故、其の天皇の命短し。　『紀』

御間城天皇とは御間城入彦五十瓊殖天皇（みまきいりひこいにえ）であり、崇神天皇である。崇神天皇は神祇を祭祀するとはいえども、根源までは探りたまわず、枝葉に留まるとある。崇神天皇は日本古来の神を祭祀するようになったけれどもそれは表面的（枝葉）であり、根源までは深く探ることをしなかったという。表面的な改宗である。自分たちの信じる神を祭祀したいために日本古来の神を祭るようにしたのである。崇神天皇は「他神」を信じる渡来人である。

第２章　崇神天皇と武埴安彦の戦い

1　崇神天皇と武埴安彦

(1) 武埴安彦の謀反

崇神天皇は各地へ将軍を派遣する。

■ 十年九月、大彦命を以て北陸へ遣わす。武渟川別を東海に遣わす。吉備津彦を西道に遣わす。丹波道主命を丹波に遣わす。因りて詔を以て曰く、「若（も）し教を受けざる者あれば兵を挙げて伐て」と。既に共に印綬を授けて将軍と為す。　『紀』

■ 大彦命は命令に従い北陸へ向かう。和珥坂の上に到る時（一書に云う、大彦命、山背の平坂に到る時）、少女が歌を歌っていた。

・御間城入彦はや　己が命を　弑（し）せむと　窺（ぬす）まく知らに　姫遊すも　『紀』

（歌の訳）御間城入彦（崇神天皇）はよ。自分の命を殺そうと窺っていることを知らないで姫と遊んでいるよ。

大彦命はこの歌を聞いてすぐに引き返し、天皇に報告する。すると聡明で叡智のある倭迹迹日百襲姫命は「これは武埴安彦（たけはにやすひこ）が謀反を企てている表（しるし）である」という。そこで崇神天皇は大彦命と和珥（わに）臣の遠祖彦国葺（ひこくにふく）を遣わし、山背に向かわせ、武埴安彦を撃たせる。

進みて那羅山（ならやま）に登り、之に軍（いくさだち）す。時に官軍は屯聚（あつま）り、草木を踏みならす。因りて其の山を号し

て那羅山という。さらに那羅山を避り、進みて輪韓河（わから河）に到り、武埴安彦と河を挟んで屯（たむろ）し、各相挑む。故、時人、改めて其の河を号して挑河（いどみ河）という。今、泉河（いづみ河）と謂うのは訛（よこなま）れるなり。（中略）是に各、先に射ることを争う。武埴安彦が先に彦国葺を射るが中（あ）たらず。後に彦国葺が武埴安彦を射る。胸に中てて殺す。其の軍衆は脅えて退く。則ち追いて河の北に破る。而して首を斬ること半（なかば）を過ぎる。屍骨が多く溢（はふ）れり。故、其の処を号して羽振苑（はふりその）という。亦、其の卒は怖れて走（にげ）て、屎（くそ）が褌（はかま）より漏れる。乃ち甲を脱いで逃げる。（中略）故、時人、其の甲を脱ぎし処を号して伽和羅（かわら）という。褌より屎の落ちたところを屎褌（くそばかま）という。今、樟葉（くすば）と謂うのは訛れるなり。　『紀』

泉河は木津川である。武埴安彦の軍と大彦命・彦国葺の軍は木津川を挟んで対峙している。武埴安彦は射殺され、崇神天皇の軍は河を渡り、羽振苑（はふりその）で武埴安彦の軍の大半の首を斬ったとある。羽振苑は今の京都府相楽郡精華町祝園（ほうその）であるという。木津川の西側にある。

残りの兵は樟葉へ逃げる。今の大阪府枚方市楠葉である。木津川に沿って逃げている。

『記』も同じようなことを書いている。大毘古命（大彦命）は少女の歌を聞いて引き返し、天皇に報告すると、崇神天皇は「山代国に在る我が庶兄建波邇安王（武埴安彦）が邪心を起こした表（しるし）なり」といい、丸邇（わに）臣の祖、日子国夫玖命（ひこくにふく）を副えて遣わす。

山代の和訶羅河（わからかわ）に到りし時、其の建波邇安王は軍を興して待ち遮る。各河を中に挟み対立して相挑む。故、其の地を号して伊杼美（いどみ）という。今は伊豆美（いづみ）というなり。

（中略）ここに建波邇安王、射るが中てることを得ず。是において国夫玖命の弾いた矢は建波邇安王を射り、死す。故、其の軍は悉く破れ、逃げ散る。ここに其の逃げる軍に追い迫り久須婆（くすば）の渡りに到る時、皆、迫め窘（たしな）められて屎が出て褌に懸かる。故、其の地を号して屎褌という。今は久須婆（くすば）という。又其の逃げる軍を遮り、以て斬る。鵜のごとく河に浮く。故、其の河を号して鵜河（うかわ）という。亦、其の軍士を斬り波布理（はふり）き。故、其の地を号して波布理曽能（はふりその）と号す。『記』

木津川を挟み対峙している。武埴安彦（建波邇安王）は射殺され、軍兵は楠葉（久須婆）まで逃げている。多くの軍士が殺されたところを波布理曽能という。

図 19　武埴安彦と崇神天皇の軍の戦い

(2) 進撃ルートの疑問

崇神天皇は『記』『紀』によると磯城に住んでいる。

■三年秋九月、都を磯城に遷す。是を瑞籬宮（みづかき宮）という。『紀』

■座師木水垣宮、治天下也。『記』

（訳）師木（しき）の水垣宮に座（いま）して天下を治める。

師木は磯城である。岩波書店の『日本書紀』の頭注に磯城は「今、奈良県櫻井市金屋付近」とある。

武埴安彦との戦いは『紀』によると十年九月である。崇神天皇は三年九月に磯城に移り住んでいるから大彦命の軍は磯城（桜井市金屋）を出発している。「進みて那羅山に登り、軍（いくさだち）す。」とある。那羅山は岩波書店の

『日本書紀』の頭注に「奈良市北郊、奈良坂付近の丘陵」とある。大彦命の軍は櫻井市金屋を出発して奈良市の北郊の奈良坂を越えて山城へ向かったことになる。

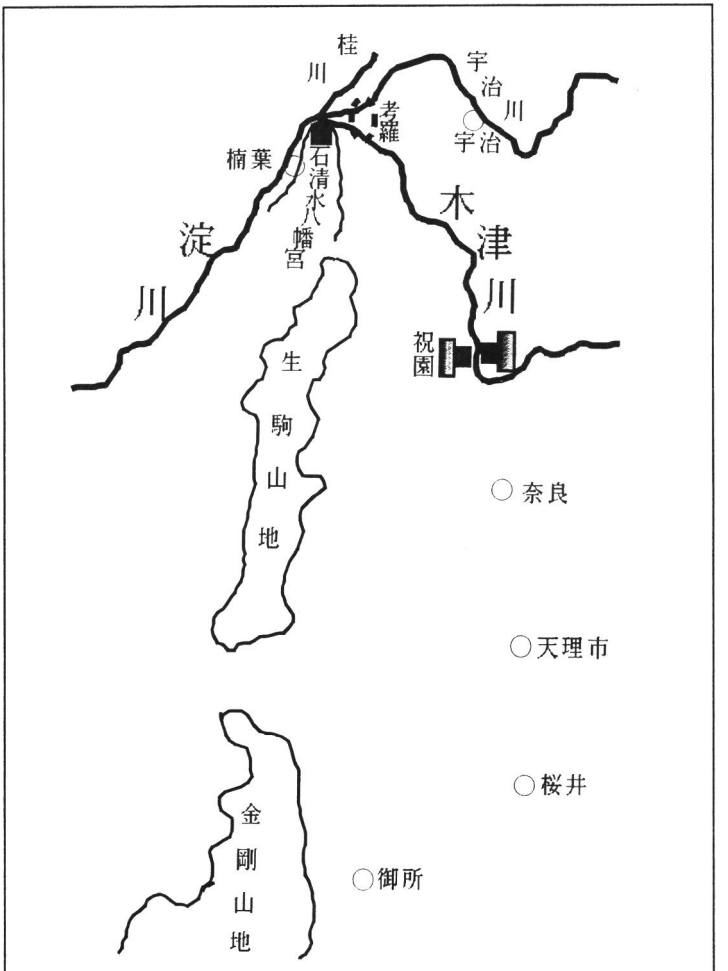


図 19　武埴安彦と崇神天皇の軍の戦い

ところが輪韓河に到り、武埴安彦と河を挟んで相挑んだとある。その河は挑河といい、今は泉河という。岩波書店の『日本書紀』の頭注に泉河は「今の木津川。京都府相楽郡木津町付近。」とある。木津川を挟んで対峙している。

武埴安彦の軍は破れ、死体が溢れる。その地を羽振苑（波布理曽能＝はふりその）という。羽振苑は岩波書店の『古事記』の頭注に「山城国相楽郡祝園の地」とあり、『日本書紀』の頭注には「今、京都府相楽郡精華町祝園」とある。武埴安彦の軍は祝園（ほうその）に陣取っていたことになる。祝園は木津川の西側にある。

大彦命の軍は木津川を挟んで武埴安彦の軍と対峙しているから木津川の東側に陣を敷いている。大彦命の軍は磯城を出て、奈良山を越えて来ているから一度木津川を渡り、木津川の東に陣を敷いたことになる。

大彦命の軍の進撃ルートは図のようになる。

図 20　大彦命軍の進撃ルート（従来説）

しかしこの進撃ルートは不自然である。武埴安彦の軍は祝園に居る。謀反を企てた軍を撃ちに行くのであるから大彦命の軍の方が当然戦力は勝っているはずである。そうであれば奈良山を越えて真っ直ぐに武埴安彦の軍を撃ちに行けばよい。何故、木津川を渡るのであろうか。河を渡れば戦力は消耗する。

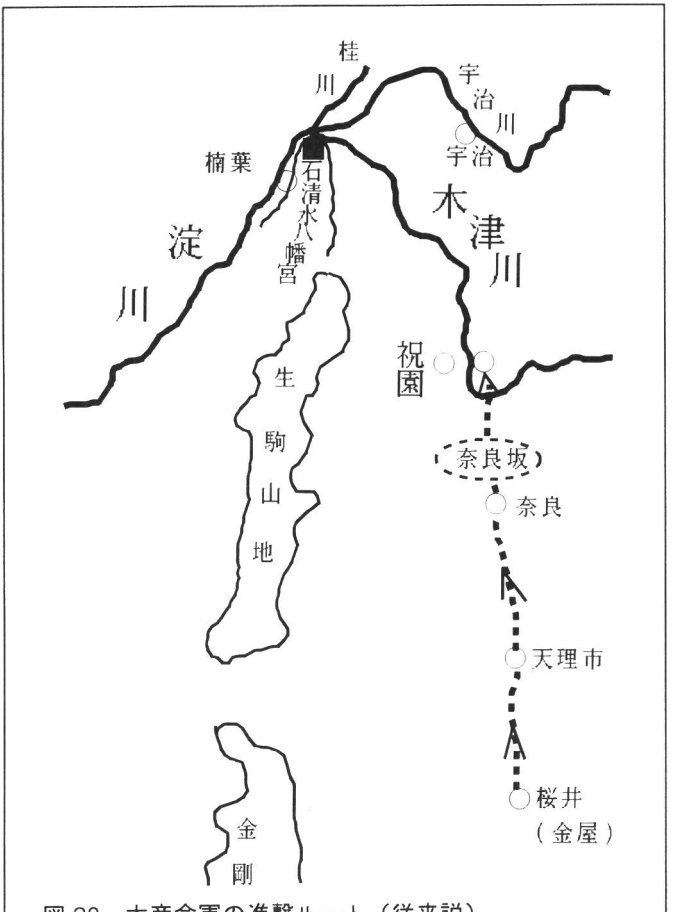


図 20　大彦命軍の進撃ルート（従来説）

2　那羅山

(1) 大山守皇子と考羅濟（かわらのわたり）

大彦命の軍は「進みて那羅山に登り、之に軍（いくさだち）す。」とある。従来のように那羅山を奈良坂であるとすれば大彦命の軍は一度木津川を渡ることになる。そのような戦法は取らないであろう。大彦命の軍は南の磯城から来たのではないと思われる。那羅山は奈良市北郊の奈良坂ではなく、他にあるのではないだろうか。

那羅山は仁徳紀にも出てくる。応神天皇は菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）を太子に定める。大山守（おおやまもり）皇子はこれを恨み、太子の菟道稚郎子を殺そうとする。

> 大山守皇子謀りて曰く、「我、太子を殺して帝位に登らむ」と。ここに大鷦鷯尊（おおさざきのみこと＝後の仁徳天皇）、預め其の謀を聞き、密かに太子に告ぐ。兵を備え、守らしむ。時に太子、兵を設け、之を待つ。大山守皇子、其の兵を備えたるを知らずに、独り数百の兵士を領（ひき）いて夜半に発ちて行く。会明（あけぼの）に、菟道（うじ＝宇治）に詣りて将に河を渡らむとす。時に太子、布袍（あさのみそ）を服て檝櫓（かじ）を取り、密かに度子（わたりもり）に接（まじ）りて大山守皇子を載せて濟（わた）る。河中に至りて度子に誂（あと）えて船を蹈（ふ）みて傾（くつがえ）す。是に大山守皇子、河に堕ちて没しぬ。さらに浮きて流れる時の歌に曰く、
>
> ・ちはや人　菟道の渡に　棹（さお）取りに　速けむ人し
> 我が対手に来む

然るに伏兵多く起こりて、岸に著くことを得ず。遂に沈みて死ぬ。其の屍を求めしむに、考羅済（かわらのわたり）に泛（う）く。（中略）乃ち那羅山に葬す。　『仁徳紀』

大山守皇子は太子（菟道稚郎子）を殺そうとして菟道（宇治）へ行く。宇治川を渡ろうとして船に乗ると、船頭に化けていた太子が船を傾けて大山守皇子を川の中へ落す。大山守皇子は溺れて、考羅濟（かわらのわたり）に浮いて出た。死体を那羅山に埋葬したとある。

死体は宇治川を流れている。那羅山は宇治川の下流にあることがわかる。浮いて出たところを考羅濟（かわらのわたり）という。考羅濟は武埴安彦との戦いに出てくる。敗れた武埴安彦の軍が逃げる場面である。

乃ち甲を脱いで逃げる。（中略）故、時人、其の甲を脱ぎし処を号して伽和羅（かわら）という。褌より屎（くそお）ちし処を屎褌（くそばかま）という。今は樟葉（くすば）というは訛れるなり。　『紀』

木津川の戦いで敗れた武埴安彦の軍は木津川に沿って逃げ、樟葉（楠葉）まで来ている。その手前に伽和羅（かわら）がある。伽和羅は木津川の下流にある。

伽和羅（かわら）は考羅濟（かわらのわたり）と同じであろう。濟（わたり）とは渡（わたり）であり、船の発着所である。考羅濟は「考羅（かわら）の渡り」であり、「考羅」は「伽和羅」である。

考羅濟は宇治川の下流にあり、伽和羅は木津川の下流にある。宇治川と木津川は合流して淀川に流れる。伽和羅（かわら）や考羅濟（かわらのわたり）は宇治川と木津川が合流して淀川に流れ込む辺りにあるのであろう。

伽和羅は、岩波書店の『日本書紀』の頭注に「今、京都府綴喜郡田辺町河原付近」とある。

昔は宇治川の下流に巨椋湖（おぐらこ）があった。宇治川は巨椋湖に流れ込み、その後木津川と合流し淀川へ注ぐ。木津川と巨椋湖が合流する辺りが考羅濟であろう。

図 21　宇治川・木津川と巨椋湖（池）

（『継体大王と渡来人』（大巧社）より）

(2) 那羅山とは

大山守皇子の死体は宇治川を流れて考羅濟に浮いて出た。それを那羅山に埋葬したとある。那羅山は考羅濟の近くにある。

『和名抄』の山城国久世郡に「那羅（なら）」がある。「那羅山」と同じ地名である。今も京都府八幡市に「上奈良」「下奈良」がある。この付近の山は男山しかない。石清水八幡のある男山である。「那羅山」は男山であろう。その下に考羅濟がある。

図 21　宇治川・木津川と巨椋湖（池）

那羅山は男山であり、崇神天皇の軍はこの那羅山を越えてきたのである。

図 22　那羅山（男山）と考羅濟

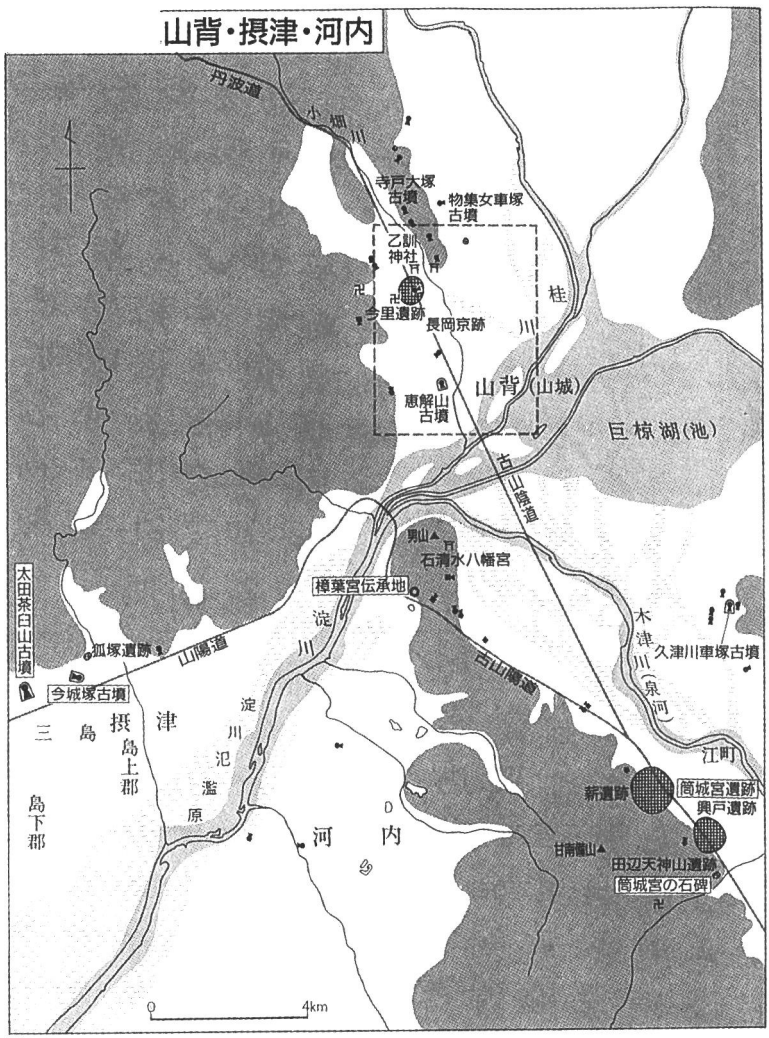


図 21　宇治川・木津川と巨椋湖（池）

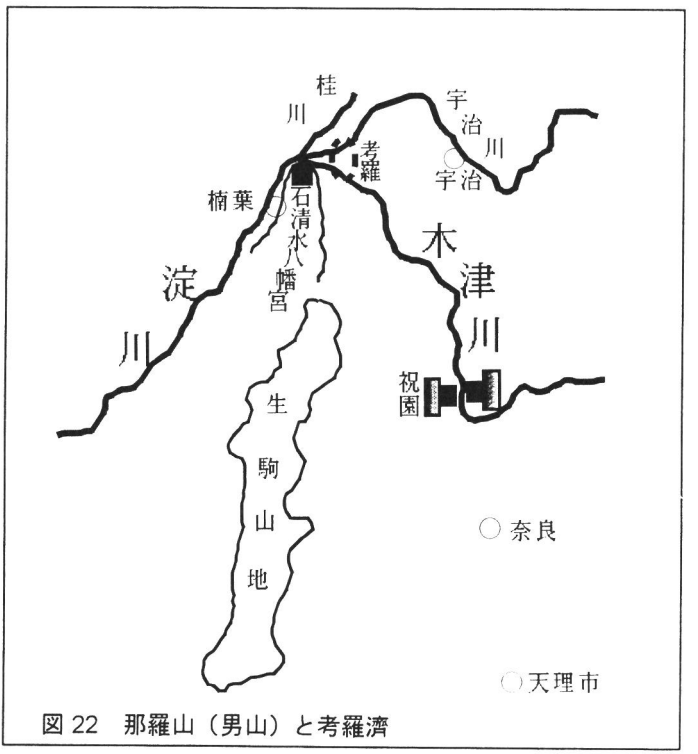


図 22　那羅山（男山）と考羅濟

第３章　崇神天皇と椿井大塚山古墳

1　現・崇神天皇陵への疑問

(1) 現在の崇神天皇陵

崇神天皇陵について『記』『紀』は次のように書いている。

■御陵在山辺道勾之岡上也。　『記』
（訳）御陵は山辺の道の勾（まが）りの岡の上に在るなり。
■葬于山辺道上陵　『紀』
（訳）山辺の道の上の陵に葬す。

崇神天皇陵は「山辺の道」にあるという。「山辺の道」は奈良県桜井市から天理市にかけての山に沿った道である。現在の崇神天皇陵は『記』『紀』のこの記述をもとに比定されている。奈良県天理市柳本町字アンドにあるいわゆる「崇神天皇陵古墳」が崇神天皇陵であるという。

最近では天皇名を付けた古墳名は避けるべきであるとして「行灯山（あんどんやま）古墳」といわれている。

(2) 崇神天皇陵への疑問

行灯山古墳は「山辺の道」にある。しかし「山辺の道の下」にある。『紀』は「山辺の道の上」にあると書いている。『記』も「山辺道勾之岡上」とあり、山辺の道の「岡の上」にあると書いている。行灯山古墳は『記』『紀』の記述に合わない。

行灯山古墳のある「山辺の道」は真っ直ぐである。『記』には「山辺道勾之岡上」とあり、山辺の道は曲がっていると書いている。これも記述に合わない。

崇神天皇陵といわれている行灯山古墳は『記』『紀』の記す崇神天皇陵に合わない。崇神天皇陵は行灯山古墳ではないと思われる。

2　崇神天皇陵とは

(1) 崇神天皇の本拠地

武埴安彦との戦いで、崇神天皇が派遣した大彦命の軍は木津川を挟んで武埴安彦と対峙している。武埴安彦の軍は木津川の西側にあり、大彦命の軍は木津川の東側にある。

崇神天皇の軍が従来いわれているように大和（奈良県桜井市）から進軍してきたのであれば木津川を一度渡り、川を挟んで対峙することになる。しかしこのような戦法は取らないであろう。崇神天皇の本拠地はもともと木津川の東側にあったのではないだろうか。「武埴安彦の戦い」は木津川の西の勢力と東の勢力の戦いだったのではないだろうか。

木津川の東側に椿井大塚山古墳がある。京都府相楽郡山城町椿井にある。木津川は東の山地から流れてきて直角に北へ曲がる。その曲がり角にある。丘陵も木津川に沿って曲がっており、古墳はその上にある。

古墳の下には道があり、丘陵に沿って曲がっている。崇神天皇陵は『記』に「山辺の道の勾の岡の上にあり。」とある。椿井大塚山古墳はまさに山辺の道が曲がっており、その岡の上にある。椿井大塚山古墳は『記』の記述にピッタリ一致する。椿井大塚山古墳は崇神天皇陵ではないだろうか。

(2) 崇神天皇の崩年干支

『記』には数人の天皇に崩年干支が書かれている。崇神天皇の崩年干支は次のようになっている。

■戊寅年十二月崩。　　『記』

戊寅年は３１８年であろう。干支は６０年で一巡するので戊寅年は２５８年、３７８年も考えられる。しかし２５８年は卑弥呼が死去して男王が立ち、壹與が擁立される頃である。神武東征の出発の時期でもある。崇神天皇がこの時期に死去するはずはない。

成務天皇にも崩年干支があり、「乙卯年三月十五日崩也」と書かれている。乙卯年は３５５年、あるいは２９５年、４１５年が考えられる。しかし成務天皇や父の景行天皇は４世紀前半に活躍した人である。死去年が２９５年や４１５年はあり得ない。成務天皇の崩年は３５５年であろう。

崇神天皇は成務天皇よりも前の人物である。したがって崇神天皇が成務天皇より後の３７８年に死去するはずはない。崇神天皇の崩年はやはり３１８年であろう。

椿井大塚山古墳は古墳時代前期前半の古墳である。四世紀前半頃の古墳であるといわれている。３１８年は椿井大塚山古墳の年代によく合っている。時期からみても、『記』『紀』の記述からみても、椿井大塚山古墳は崇神天皇の陵である。

3　椿井大塚山古墳

(1) 椿井大塚山古墳の概要

『探訪　日本の古墳　西日本編』（有斐閣選書Ｒ）には椿井大塚山古墳について概略次のように書いている。

□椿井大塚山古墳

○所在　京都府相楽郡山城町椿井

○墳丘

■丘陵の端に営まれた前方後円墳である。

■葺石や埴輪の存在については確認できなかった。

■墳丘の規模　　主軸の長さ１８５ｍ、後円部径７５ｍ

○埋葬施設

■竪穴式石室

板石を小口積みにした細長い石室。石室の高さが異常に高い。

石室の内法　長さ6.9ｍ、幅1.15ｍ、高さ3ｍ。

■床…二重の板石敷と礫敷でととのえ、その上に粘土床があり、割竹形木棺を安置。棺材は高野槙。

図 23　椿井大塚山古墳の竪穴式石室
（『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』より）

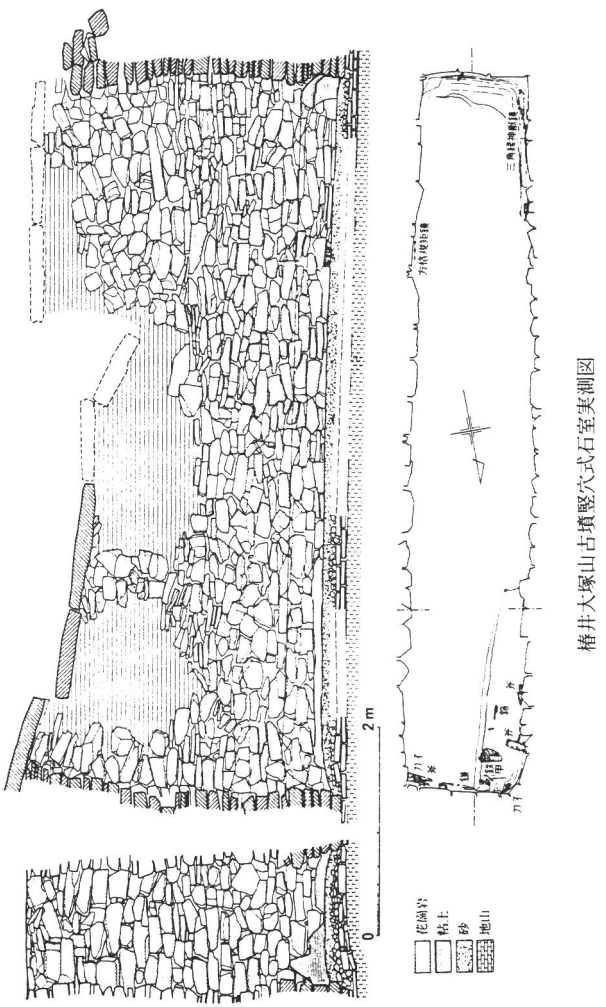


図 23　椿井大塚山古墳の竪穴式石室

○別の遺構　石室の床面と同じ高さにある。

朱に染まった三面の鏡が出土。

○副葬品

■３０数面の鏡 石室の周壁に沿っておかれていたらしい。原位置にのこっていた二面は鈕のある背面を内向きに石壁にたてかけてあった。

■石室の北端部

鉄甲、刀子、斧、ヤリガンナ

■石室の両側面

鉄刀、剣、鏃

■その他

武器類…鉄刀、素環頭大刀、鉄剣、鉄槍、銅鏃、鉄鏃

武具…　小札革綴冑（こざねかわとじかぶと）

工具…鉄斧、鎌、刀子、錐、鑿、ヤリガンナ

漁具…銛、魚叉、釣針

□玉、釧類は一片も出土していない。

□三角縁神獣鏡が３０数面ある。すべて舶載鏡である。

□竪矧板（たてはぎいた）の短甲と鉄小札革綴の冑がある。鉄小札革綴冑は類例の少ないものとして注目される。

(2) 小札革綴冑

椿井大塚山古墳から鉄製の小札革綴冑（こざねかわとじかぶと）が出土している。

図 24　小札革綴冑復元図

（『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』より）

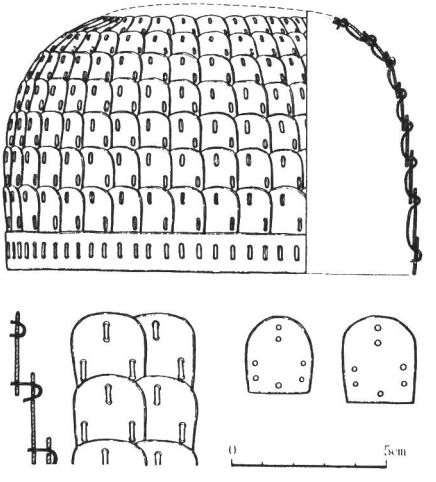


図 24　小札革綴冑復元図

『古墳時代の研究８　古墳Ⅱ　副葬品』（雄山閣）によると、小札革綴冑は８例の出土が知られているという。その中に鉄製甲冑の変遷図がある。

図 25　鉄製甲冑の変遷

椿井大塚山古墳の小札革綴冑は鉄製甲冑としては日本で最初に現れるものである。鉄製小札革綴冑は朝鮮半島からの出土例はなく、中国製であろうといわれている。

『日本考古学』第２号（日本考古学協会　1995.11) 所収の「東アジアにおける甲冑の系統と日本」で高橋工氏は次のように述べている。

多くの小札を革綴じで誤差無く連結するという高度な技術を持ち、同時代や後続の甲冑制作技術にまったく影響を与えなかった（もしくは日本の工人が模倣すらもできなかった）ことから、製品として輸入されたものであろう。（高橋工氏）

中国でつくられた甲冑が椿井大塚山古墳に直接持ち込まれている。

同じ小札革綴冑が滋賀県雪野山古墳・京都府瓦谷古墳・京都府向日市妙見山古墳・三重県上野市石山古墳・福岡県京都郡石塚山古墳等から出土しているという。

(3) 刀と剣

『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』（京都大学文学部博物館図録）には、椿井大塚山古墳から出土した「刀と剣」について次のように書いている。

刀を７点以上出土し、うち１点が把（つか）の端を楕円形の環につくる素環頭大刀（そかんとうたち）である。全長９３.３ｃｍと長大で、中国製と推定される。把と刃との間の部分（把縁）に装具の痕が残る。

刀剣には、木製の鞘をもち、帯状の布で巻き締めたものがある。

全長９３.３ｃｍの長大な素環頭大刀は中国製であろうという。小札革綴冑と一緒に中国から直接持ってきたのであろう。

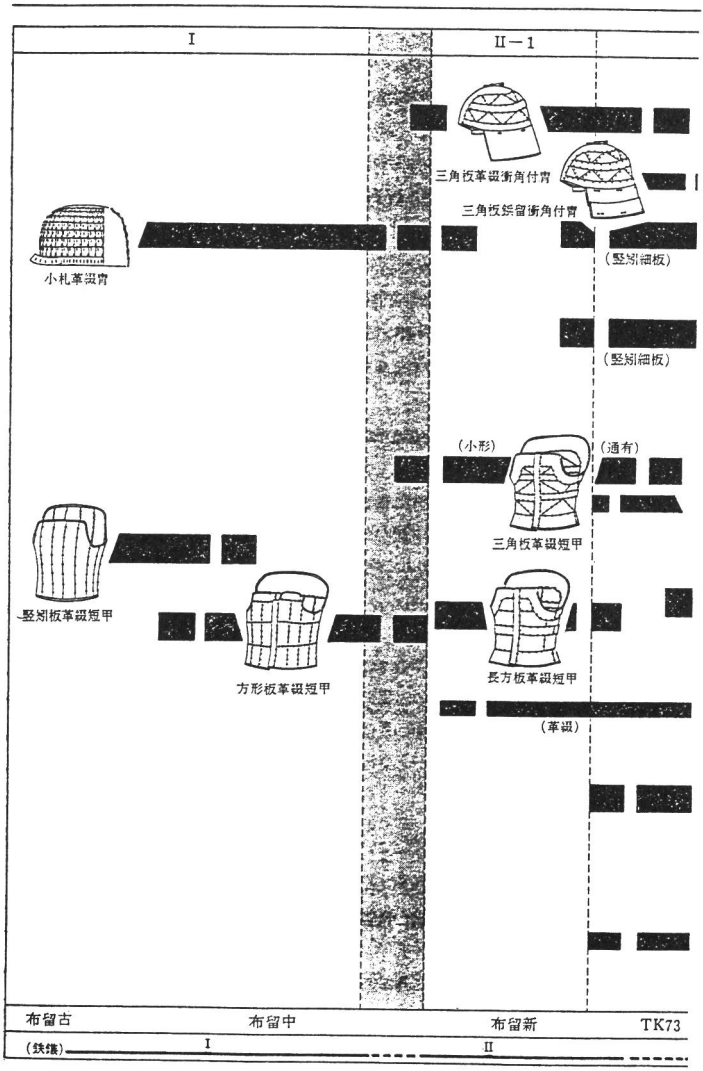
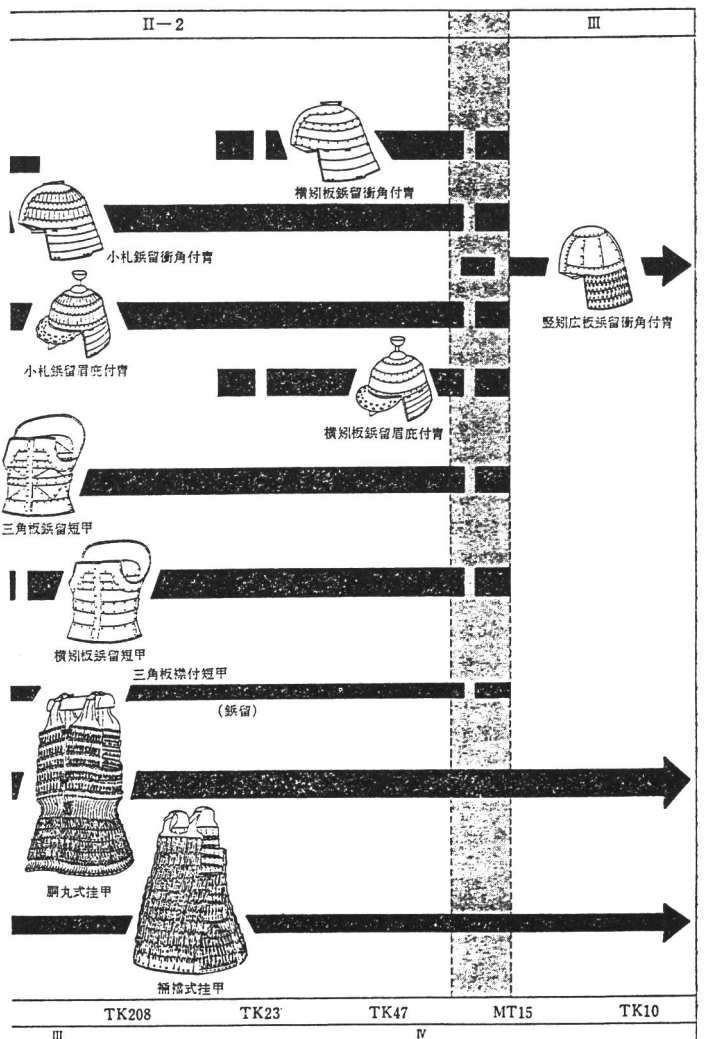

I
II－1
三角板革綴衝角付冑
三角板鋲留衝角付冑
小札革綴冑
(竪矧細板)
(竪矧細板)
(小形)
(通有)
三角板革綴短甲
竪矧板革綴短甲
方形板革綴短甲
長方板革綴短甲
(革綴)
布留古
布留中
布留新
TK73
(鉄鏃)
I
II

図 25　鉄製甲冑の変遷



(甲冑の図:は小林謙一1990「歩兵と騎兵」『古代史復元』よりトレース,但し一部修正,付加。主要古墳との対照は〔田中1990a〕,鉄鏃は田中〔1990b〕を参照)

(4) 生産用具

『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』（京都大学文学部博物館図録）には「生産用具」の項でも次のように書いている。

○農工具

農具には鎌が３点ある。長方形の鉄板に刃をつけ、柄に装着するため一端を曲げている。大きいものは長さ１３.０ｃｍ。柄に対して刃はやや鋭角についていたことが木柄の痕跡からわかる。

木工具のなかで斧には扁平な短冊形のものと、柄を差し込む袋のあるものとがある。短冊形斧は長さ２４ｃｍ前後と１４ｃｍ前後との２種類があり、いずれもまっすぐの木柄に挟みこむ。一方の袋斧は柄に対して刃を直交させる手斧として用いられ、やや厚手で刃幅の狭いものと薄手で刃が大きく広がったものがある。この刃幅の広い袋斧はわが国では類例に乏しく、舶来品かもしれない。

椿井大塚山古墳出土の鉄斧の中で刃幅の広い袋斧は日本列島には類例が無く、舶来品であろうという。やはり中国からもたらされたものであろう。

○漁具

鉄製の銛（もり）、魚叉（やす）、釣針が確認され、古墳の出土品としては漁具はあまり一般的でないだけに貴重な資料である。１０数本ある銛は、先の尖った方柱状の棒に逆刺（かえり）をつけ、茎を木柄に差しこんでいる。

魚叉は、針のような細い棒に逆刺をつけ、３ないし４本を束ねて作ったもの。ほかに削刀子と呼ばれるものも、木柄と糸巻の痕が残り、本来は２、３本を組み合わせて用いた刺突具と考えられる。

釣針は、両端を欠くが、現長は４．６ｃｍある。

椿井大塚山古墳からは漁具が出土している。日本の古墳から出土するのは珍しいという。

このように椿井大塚山古墳から出土した品々は中国から直接もたらされたものが多い。崇神天皇が中国から持ってきたのではないだろうか。

さらに重要なことは鏡は大量に出土しているが玉類が一つもないことである。「三種の神器」は出土していないといえる。

(5) 三角縁神獣鏡の同笵鏡と分有関係

小林行雄氏は全国各地から出土する鏡を比較して「同笵鏡の分有関係」を明らかにした。椿井大塚山古墳から出土した鏡と同じ型の鏡が全国各地から出土している。小林氏は椿井大塚山古墳の被葬者が各地の首長に配布したものであろうという。

図 26　同笵鏡の分有関係（『日本国家の起源』（角川文庫）より）

小林氏は『古墳の話』（岩波新書）の中で「同笵鏡の分有関係」について次のように述べている。

> （同じ鋳型でつくった鏡を同笵鏡という）
> 同笵鏡はまだ六枚という例がない。魏の時代には、一組の同笵鏡の数を五枚にとどめる風習があったかと思われる。（中略）
> いままで一組そろったまま保存されていた同笵鏡を、広い地域の首長に少しずつ分配するということは、かなり政治的な意味をふくんだことにちがいない。（中略）畿内の鏡の分配にあたって、椿井大塚山古墳にほうむられた一首長が、重要な役割を演じていたにちがいがない。（中略）大和と北九州とをむすぶ交通路として、木津川

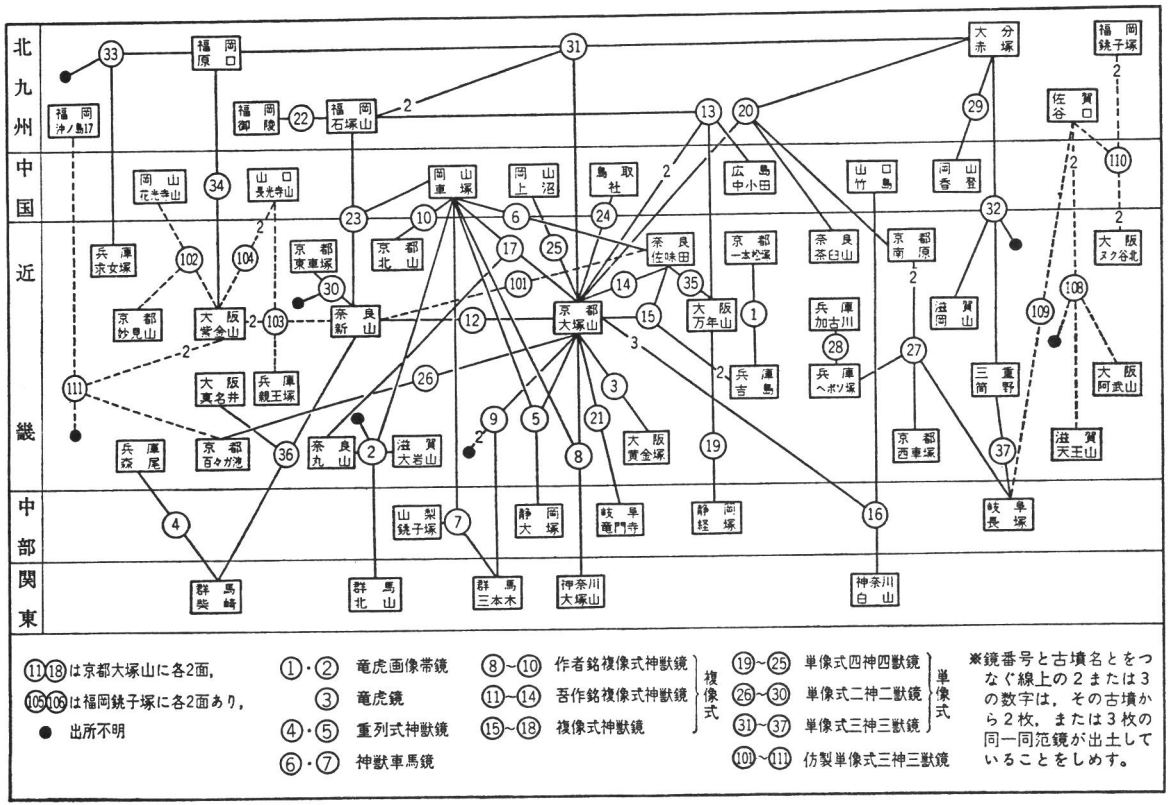
から淀川をへて瀬戸内海に通ずる航路を利用したばあいに、椿井の首長の占拠地域は、まさしくこの木津川水路の起点にあたっている。それが、椿井の首長をして船舶の管理者たらしめ、航行の担当者たらしめたのではあるまいか。かつ、その功績によって、多数の鏡をえたと考えてはどうであろうか。（中略）

大和の使臣が、あるいは北九州へ、あるいは関東へ派遣されて、各地の首長に大和政権への従属を勧告したというような現象があったことを、ただ同笵鏡のみから推論したのでは、文献をおもんじる歴史家の賛同をえることは困難であるかもしれない。しかし文献といえば、「記紀」にもこれに類する伝承はしばしばある。たとえば、崇神天皇による四道将軍の派遣とか、景行天皇の熊襲征伐と武内宿禰の東国視察とか、あるいは日本武尊の熊襲および蝦夷征伐としてつたえられているものなどがそれである。（中略）

あたかもこれが吉備武彦の古墳であると推定しているようにうけとられるかもしれぬが、岡山市湯迫（ゆば）の車塚古墳から発見された十三枚の鏡のなかには、三角縁神獣鏡の同笵鏡が八種九枚もあり、（後略）

小林行雄氏はこのように述べている。三角縁神獣鏡は大和政権が椿井大塚山古墳の首長を通して地方の首長に従属の証として与えたものであると考えている。これが「同笵鏡の分有関係」である。

図26 同笵鏡の分有関係



第４章　崇神天皇と夫余族

1　崇神天皇は渡来人

(1) 異宗教

崇神天皇は大殿に天照大神や倭大国魂神を祭るが、一緒に居るのが「心安まらず」であるという。淳名城入姫命は倭大国魂神を祭るのが苦痛で、髪は抜け、体は痩せ細ったとある。崇神天皇や淳名城入姫命は天照大神や倭大国魂神を祭らない、「他神」を信じる人である。

大物主大神を祭る時も、崇神天皇は日本中を探して大田田根子を見つけて祭らせている。崇神天皇は大物主大神を祭る方法を知らなかったのである。天照大神や大物主大神は日本古来の神である。『記』『紀』はこれらの神を最高神として書いている。崇神天皇や淳名城入姫命はこれらの最高神を異宗教の神としている。崇神天皇や淳名城入姫命は日本列島に古来から居たのではなく、新しく渡来してきた渡来人であろう。

(2) 疫病の流行

崇神天皇の時代に疫病が流行する。

■ 此の天皇の御世に、役病が多く起こり、人民は死に盡（つき）むとす。
『記』

■ 五年、国内に疾疫多く、民は死亡する者有り、且つ大半になる。
『紀』

疫病が流行して国民の大半が死去したという。人民の大半が死去するような病気は普段の生活をしていたのでは起こらない。病気が異常に蔓延するのは新しい病気によるものであろう。日本列島にそれまで存在しなかった新しい病原菌がもたらされたのである。そのため免疫のない人民が次々と病気になった。

崇神天皇の時に疫病が蔓延して人民の大半が死去したのは崇神天皇が渡来人であり、新しい病気を持ち込んだからであろう。最近の考古学によれば縄文時代の人骨には病気に冒された痕跡はないが、古墳時代の人骨からはしばしば結核やその他の病気に冒された痕跡が見つかるという。弥生時代や古墳時代に渡来人が新しい病原菌を持ち込んでいる。

(3) 日本列島に類例のない武器・武具

崇神天皇の墓は椿井大塚山古墳である。この古墳からは新しい武器や武具、生活用具等が出土している。

小札革綴冑や素環頭大刀・鉄斧は中国製であるという。崇神天皇が中国大陸から持ってきたものであろう。

竪穴式石室の高さは３ｍもある。それ以前にはなかった高度な技術で造られている。中国の技術であろう。

椿井大塚山古墳は築造技術をみても、出土品をみてもそれ以前の弥生人には作ることのできないものばかりである。渡来人がもってきたものであろう。

2　崇神天皇と迦葉原夫餘

(1) 迦葉原夫餘と依羅国

『桓檀古記』に、渡来人が倭人を平定して王になったという記事がある。

> 正州依羅国所都為鮮卑慕容廆所敗、憂迫欲自裁。忽念我魂尚未泯。則何往不成乎。密囑于子扶羅。踰白狼山夜渡海口。従者数千。遂渡定倭人為王。自以為応三神符命使群臣献賀儀。或云依慮王為鮮卑所敗逃入海、而不還。子弟走保北沃沮。明年子依羅率衆数千越海、遂定倭人為王。　『桓檀古記』大震国本紀
>
> （訳）正州の依羅国は都する所を鮮卑慕容廆の為に敗られる所となり、憂迫り自ら裁つことを欲す。忽ち念ず、我が魂は尚未だ泯（ほろ）びず。則ち、何ぞ往きて成らざらんか。密に子の扶羅に囑（たく）す。白狼山を踰え、夜海口を渡る。従う者数千人。遂に渡り、倭人を定めて王と為る。自ら応三神符命（？）と為るを以て、群臣をして賀儀を献ぜしむ。
>
> 或は云う、依慮王は鮮卑の為に敗られる所となり逃げて海に入る。而して還えらず。子弟は走り北沃沮を保つ。明年、子の依羅は衆数千を率いて海を越え、遂に倭人を定めて王と為る。

依羅国は鮮卑慕容廆の為に敗られ、子の扶羅が逃げて海を渡り、倭人を定めて王になったとある。依羅国の皇子が日本列島へ逃げてきている。

『晋書』には夫餘国が慕容廆によって滅ぼされたという記事がある。

> 武帝時、頻来朝貢。至太康六年、為慕容廆所襲破、其王依慮自殺、子弟走保沃沮。　『晋書』東夷伝

（訳）武帝の時、頻りに来り朝貢す。太康六年（２８５年）に至り、慕容廆の為に襲われ破られる所となり、其の王依慮は自殺し、子弟は走り沃沮を保つ。

夫餘国は太康六年（２８５年）に鮮卑慕容廆によって滅ぼされ、王の依慮は自殺し、子弟は沃沮へ逃げて国を保ったとある。

この夫餘は『三国志』に出てくる夫餘である。隣りに沃沮がある。

■夫餘在長城之北。去玄菟千里。南與高句麗、東與挹婁、西與鮮卑接。

『三国志』夫餘伝

（訳）夫餘は長城の北に在り。玄菟郡を去る千里。南は高句麗と、東は挹婁と、西は鮮卑と接す。

■高句麗在遼東之東。南與朝鮮・濊狛、東與沃沮、北與夫餘接。

『三国志』高句麗伝

（訳）高句麗は遼東の東にあり。南は朝鮮・濊狛と、東は沃沮と、北は夫餘と接す。

夫餘の南に高句麗があり、その東に沃沮がある。沃沮は夫餘の東南にある。これが魏時代（２２０－２６５年）の夫餘国である。井上秀雄氏は『古代朝鮮』（ＮＨＫブックス）の中で夫餘や沃沮の位置を示している。

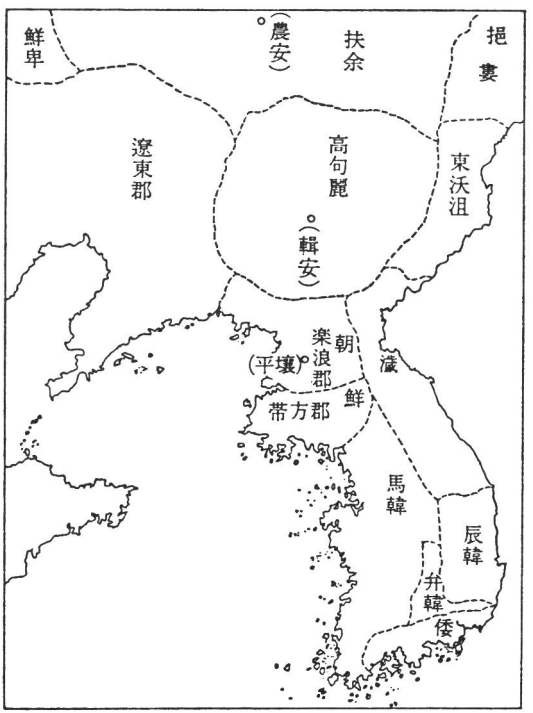
図 27　夫餘（扶余）と鮮卑・沃沮

（『古代朝鮮』の「東夷伝」による諸民族の地理的位置）

夫餘の西に鮮卑がいる。夫餘は鮮卑に伐たれて東南の沃沮へ逃げている。西から攻められたので東へ逃げている。

『桓檀古記』の記事の後半に「或いは云う」とあり、「依慮王が鮮卑に伐たれて自殺し、子弟が北沃沮へ走る」とある。これは『晋書』の記述と一致する。しかし「倭人を定めて王となる」とあり、この部分は『晋書』にはない。おそ

らく『桓檀古記』の前半の記事が伝承の原形であり、「或いは云う」以下は『晋書』をみて、伝承の内容を『晋書』に合わせて書き直したのであろう。



「東夷伝」による諸民族の地理的位置

図 27　夫餘（扶余）と鮮卑・沃沮

『晋書』には、夫餘国は沃沮へ逃げたとある。夫餘国と沃沮は陸続きであるから陸路で逃げている。

ところが『桓檀古記』には「海口を渡り」とある。海を渡っている。また「白狼山を越えて」とある。白狼山は遼西にある。夫餘国からみると鮮卑よりもさらに西にある。西から攻められているのに西の遼西へ逃げるはずはない。『桓檀古記』の「依羅国」は『三国志』の夫餘国ではない。

夫餘国は当時二つあった。一つは『三国志』に書かれている夫餘国である。もう一つは迦葉原夫餘である。西暦２２年に夫餘国は高句麗に伐たれて滅びる。その一派が迦葉原夫餘となり白狼山の近くに住み着いている。（古代史の復元①『倭人のルーツと渤海沿岸』参照）

西暦２００年頃になると迦葉原夫餘の中から百家が海を渡り帯方の地へ来て百済を建国する。『隋書』は次のように伝えている。

> 始立其国于帯方故地。漢遼東太守公孫度以女妻之。漸以昌盛、為東夷強国。初以百家済海、因号百済。　『隋書』
> （訳）始め其の国を帯方の故地に立つ。漢の遼東太守公孫度は娘を以てこれを妻とす。漸くして昌盛となり、東夷の強国となる。初め百家が海を済（わた）る。因りて百済と号す。

百の家が海を済（渡）って帯方の故地へ来たので「百済」というとある。百済は夫餘族である。『北史』は次のように書いている。

> 魏延興二年、其王餘慶、始遣其冠軍将軍（中略）上表自通云、「臣與高麗、源出夫餘。」　『北史』
> （訳）魏の延興二年（４７２年）、其の王の餘慶は始めて其の冠軍将軍を遣わす。（中略）上表して自ら通じて云う、「臣は高句麗と、源は夫餘より出る。」

百済王餘慶は朝貢して、「私は高句麗と同じく夫餘の出である。」と述べている。百済は夫餘である。

この夫餘は『三国志』の夫餘ではない。夫餘国であれば海を渡って帯方の地へ来るには朝鮮半島をぐるっと一周することになる。そのような航海はしないであろう。

この夫餘は遼西の迦葉原夫餘である。迦葉原夫餘の地はその後百済に支配される。『宋書』や『梁書』に「晋の世、百済が遼西を略有す。」とか、「（百済は）遼西、晋平の二郡を據有す。」とある。百済は故郷の迦葉原夫餘を支配している。「晋の世」とあるから２６５年－３１６年ころのことであろう。

(2) 倭人平定の時期

『晋書』は慕容廆について次のように書いている。

> 渉帰死、其弟耐簒位、将謀殺廆、廆亡潜以避禍。後国人殺耐、迎廆立之。
> 初、渉帰有憾於宇文鮮卑、廆将修先君之怨、表請討之。武帝弗許。廆怒、入寇遼西、殺略甚衆。帝遣幽州諸軍討廆、戦于肥如、廆衆大敗。自後復掠昌黎、毎歳不絶。
> 又率衆東伐扶餘、扶餘王依慮自殺。（中略）立依慮之子為王。
>
> 『晋書』慕容廆記載

（訳）渉帰（慕容廆の父）死す。其の弟の耐は位を簒（うば）い、将に（慕容）廆を殺さんと謀る。廆は亡げて潜み、以て禍を避く。後に国人は耐を殺し、廆を迎え、之を立つ。
初め、渉帰は宇文鮮卑に憾（うらみ）有り。廆は将に先君之怨を修めんとす。表して之を討つことを請う。武帝は許るさず。廆は怒り、遼西に入り寇す。殺略甚だ衆（おお）し。帝は幽州の諸軍を遣わし廆を討つ。肥如で戦う。廆の衆は大敗す。これより後、復た昌黎を掠（かす）む。毎歳絶えず。

又、衆を率いて東に扶餘を伐つ。扶餘王依慮は自殺す。（中略）依慮の子を立て王と為す。

父の渉帰が死去したのは２８４年である。父の弟の耐は簒奪して王位につくが国人は耐を殺して慕容廆を王に迎える。慕容廆が王位についたのは２８５年である。

慕容廆は父の怨みをはらすために武帝に宇文鮮卑を討つことを願い出る。しかし武帝は拒否する。それを怒り、慕容廆は「遼西に入り寇す。殺略甚だ衆（多）し。」とある。この時、遼西にあった迦葉原夫餘は侵略されたのであろう。武帝は慕容廆を討伐する軍を派遣し、「肥如で戦う」とある。肥如は長城（現在の万里の長城と同じ）の内側（南）にある。慕容廆は万里の長城を越えて中国の領域まで侵入している。遼西は完全に慕容廆の手に落ちている。迦葉原夫餘はすでに慕容廆に伐たれている。

その次に、「又、衆を率いて東に扶餘を伐つ。」とある。『晋書』に「２８５年に夫餘国が慕容廆によって滅ぼされた」という記事のことである。したがって慕容廆が遼西を伐ったのはそれよりも前である。慕容廆が王位についたのは２８５年であるから、慕容廆が遼西を伐ったのも２８５年ということになる。

扶羅は海を渡り逃げた。従者数千人とある。多くの人々が日本列島へ逃げて来ている。「倭人を定めて王となる」とある。扶羅は日本列島の王になっている。

(3) 扶羅と崇神天皇

崇神天皇は第１０代天皇である。日本列島の王である。ところが崇神天皇はこれまでみてきたように渡来人である。崇神天皇は扶羅ではないだろうか。日本へ逃げてきて「倭人を定めて王になった」のではないだろうか。

時期もよく合う。崇神天皇の崩年は３１８年である。迦葉原夫餘が慕容廆に伐たれたのは２８５年である。渡来してから死去するまで３３年ある。２０－３０才頃に渡来したとすると、死去する時は５３－６３才位になっている。当時の王の平均寿命であろう。崇神天皇の崩年とよく合う。

崇神天皇は武埴安彦（建波邇安王）を討ち、各地へ将軍を派遣する。

- 大毘子命を高志（こし）道に遣わし、其の子の建沼河別命を東方十二道に遣わし、そのまつろわぬ人を和平せしむ。又日子座王（ひこいますおう）を旦波（たんば）国に遣わし、玖賀耳之御笠（くがみみのみかさ）を殺さしむ。　『記』
- 十年秋七月、群卿に詔して曰く、「（中略）群卿を選び、四方に遣わし、朕が憲（のり）を知らしめよ」という。九月、大彦命を以て北陸に遣わす。武渟川別（たけぬなかわわけ）を東海に遣わす。吉備津彦を西道に遣わす。丹波道主命を丹波に遣わす。　『紀』

崇神天皇は武埴安彦（建波邇安王）を討ち、さらに四道将軍を派遣して各地を平定している。これが「倭人を定めて王となる」のであろう。

崇神天皇の墓は椿井大塚山古墳である。この古墳からは中国製の品々が数多く出ている。

- 小札革綴冑……中国製
- 素環頭大刀……中国製
- 刃幅の広い袋斧……日本列島には類例が乏しく、舶来品であろう。

これらの中国製の品々は中国から直接持ってきたものであろう。扶羅が遼西から持ってきたのではないだろうか。

崇神天皇は渡来人であり、迦葉原夫餘から逃げてきた扶羅であろう。

百済も迦葉原夫餘が築いた国である。崇神天皇と百済は同族である。

(4) 崇神天皇と「初国」

崇神天皇に尊号がつけられている。

■故、称其御世、謂所知初国之御真木天皇也。　『記』
（訳）故、其の御世を称えて、初国を知らす所の御真木天皇と謂うなり。
■故、称謂御肇国天皇也。　『紀』
（訳）故、称して肇国（はつくに）を御しし天皇と謂うなり。

「肇国」は「初国」と同じである。どちらも「ハツクニシラススメラミコト」という訓註がついている。

■所知初国之御真木天皇（ハツクニシラスミマキノスメラミコト）
■御肇国天皇（ハツクニシラススメラミコト）

ところが従来は「ハツクニシラススメラミコト」を「はじめて天下を治めた天皇」であると解釈してきた。その結果、崇神天皇は「はじめて天下を治めた天皇」であり、崇神天皇こそ初代天皇であるといわれている。

神武天皇にも尊号がある。

■始馭天下之天皇、号曰神日本磐余彦火々出見天皇。　『紀』

これにも「ハツクニシラススメラミコト」という訓註がついている。神武天皇も、崇神天皇も「ハツクニシラススメラミコト」である。二人の「ハツクニシラススメラミコト」が存在する。これは現在も混乱しており、いろいろな説が出されている。

○代表的な二説

①神武天皇と崇神天皇は同一人物である。

②崇神天皇が本来の「ハツクニシラススメラミコト」である。皇室の起源を古くさかのぼらせるために神武天皇をつくりだした。

古田武彦氏はこの問題を取り上げて『盗まれた神話』（朝日新聞社）の中で概略次のように述べている。

a．神武天皇の「始馭天下之天皇」に「ハツクニシラススメラミコト」という訓註がつけられたのは平安時代以降である。奈良時代の古写本には訓註はない。

b．「始馭天下之天皇」は「ハツクニシラススメラミコト」とは読めない。「始めて天の下に馭（ぎょ）しし天皇」と読むべきである。

c．崇神天皇の「所知初国之御真木天皇」を「はじめて国を治めた天皇」と読むことはできない。「はじめて国を治めた天皇」と解するには次のような語順でなければならない。

「初所知国天皇」

d．崇神天皇の「所知初国之御真木天皇」は「初国を知らす天皇」である。「初国」に相対する語は「本国」である。

「本国」……大和の国

「初国」……東方十二道や高志（越）等の「新征服地」

古田氏はこのように述べている。古田氏の言うとおりである。崇神天皇の「所知初国之御真木天皇」は「初国を知らす所の（御真木）天皇」であり、「初めて国を治めた（知らしし）天皇」とは読めない。

初国に対応する語は本国である。これも古田氏の言うとおりである。しかし「本国」と「初国」の比定は間違っていると思われる。

「本国」は本国（もとのくに）であり、本拠地（故郷）である。それに対して「初国」は「初めての国」である。「本国」の中に「初国」は入っていないし、また「初国」の中に「本国」は入っていない。

崇神天皇は「初国」を治めた天皇である。「初国」だけを治めた天皇であり、「本国」は治めていないと解釈すべきであろう。

古田氏は「本国」は大和の国であり、「初国」は新征服地であるとし、崇神天皇は大和（本国）に居て、新征服地（初国）も支配したとしている。しかしこのような場合は「初国を知らす天皇」とはいわないであろう。

高句麗の好太王が良い例である。好太王は「広開土王」である。土地を広く開いた王という意味である。「本国」に居て、新しい土地「初国」を拡大しているからこのような表現になっている。

『紀』は「初国を知らす所の天皇」と書いている。崇神天皇が支配しているのは「初国」だけである。

崇神天皇の「本国」は中国の遼西の迦葉原夫餘であろう。「初国」は日本列島である。崇神天皇にとっては日本列島は初めての国「初国」である。「所知初国之御真木天皇」とは「初めての国（日本列島）を治めた天皇」という意味である。崇神天皇が渡来人であることを表している。

(5) 海外記事

崇神紀には海外に関する記事が多い。

- 七年二月、亦、海外の国有り。自ら帰伏するであろう。
- 十年十月、群臣に詔して曰く、「今反（そむ）ける者は悉く誅に伏す。畿内には事無し。唯、海外には荒（あら）ぶる俗（ひとども）が騒動して未だ止まず。其れ四道将軍等、今急に発て。」という。

・十二年三月、詔す、「朕、初めて天位を承（う）けて、宗廟を保つを獲る。（中略）海外すでに帰化す。（後略）
・十七年七月、詔して曰く、「船は天下の要用なり。今、海辺の民は船無きによりて甚だ歩運（みちはこび）に苦しむ。其れ諸国に命じて船舶を造らしめよ」という。

『記』『紀』に、「海外」という言葉がこれほど多く出てくるのは珍しい。崇神天皇が海外の国々に関心を持っているからであろう。崇神天皇は中国から逃げてきている。祖国（故郷）や中国（中原）、および朝鮮半島の国々に対して常に興味を持っていたのであろう。

ただしここでは「海外に荒（あら）ぶる俗（ひとども）が騒動して未だ止まず。其れ四道将軍等、今急に発て。」とあるように「海外」は「畿外」という意味で使われている。しかし「海外の国有り。自ら帰伏するであろう。」ともあり、崇神天皇の本心はやはり本当の「海外」であろう。

船を造らせているのも「海外」を意識しているからであろう。崇神天皇は鮮卑慕容廆に伐たれて国を捨てて逃げてきている。それを取り戻したいと願っていたのではないだろうか。

3　崇神天皇の渡来ルート

(1) 日本列島へ

『桓檀古記』は崇神天皇の渡来を次のように書いている。

正州依羅国所都為鮮卑慕容廆所敗、憂迫欲自裁。忽念我魂尚未泯。則何往不成乎。密囑于子扶羅。踰白狼山夜渡海口。従者数千。遂渡定倭人為王。　　『桓檀古記』大震国本紀

（訳）正州の依羅国は都する所を鮮卑慕容廆の為に敗られる所となり、憂迫り自ら裁つことを欲す。忽ち念ず、我が魂は尚未だ泯（ほろ）びず。則ち、何ぞ往きて成らざらんか。密に子の扶羅に囑（たく）す。白狼山を踰え、夜海口を渡る。従う者数千人。遂に渡り、倭人を定めて王と為る。

依羅国（伽葉原夫餘）は慕容廆に侵略され、王は自殺し、子の扶羅（崇神天皇）は従者数千人を連れて「白狼山を踰え、夜海口を渡る。」とある。白狼山は大凌河の上流にある。白狼山を越えて渤海へ出ている。渤海から黄海を通り、朝鮮半島の西側を南下して日本列島へ来ている。

図 28　扶羅（崇神天皇）の渡来ルート（渤海、朝鮮半島）

(2) 山城の椿井へ

崇神天皇は北部九州から瀬戸内海へ入り、大阪へ来て淀川を遡る。桂川、宇治川、木津川が合流する地点まで来る。この先どちらへ行けば定住する良い土地が得られるだろうか。それを判断するために男山（那羅山）へ登る。これが「進みて那羅山に登り、軍（いくさだち）す。」であろう。

『紀』はこの伝承を武埴安彦との戦いの時としている。しかし武埴安彦との戦いで那羅山に登ることはない。「武埴安彦の戦い」は木津川の東側と西側の争いであり、武埴安彦の軍は祝園に居る。那羅山は遠い。渡来してきたときに「那羅山に登った」という伝承が後に戦いの場面に結びつけられたのであろう。

崇神天皇は木津川の道を選んだ。木津川を遡って行くと西側にはすでに武埴安彦が居り、その地域を支配していた。そこで崇神天皇は木津川の東側に定住することを決めた。山城の椿井に本拠地を定めたのである。

図 29　山城の椿井へ

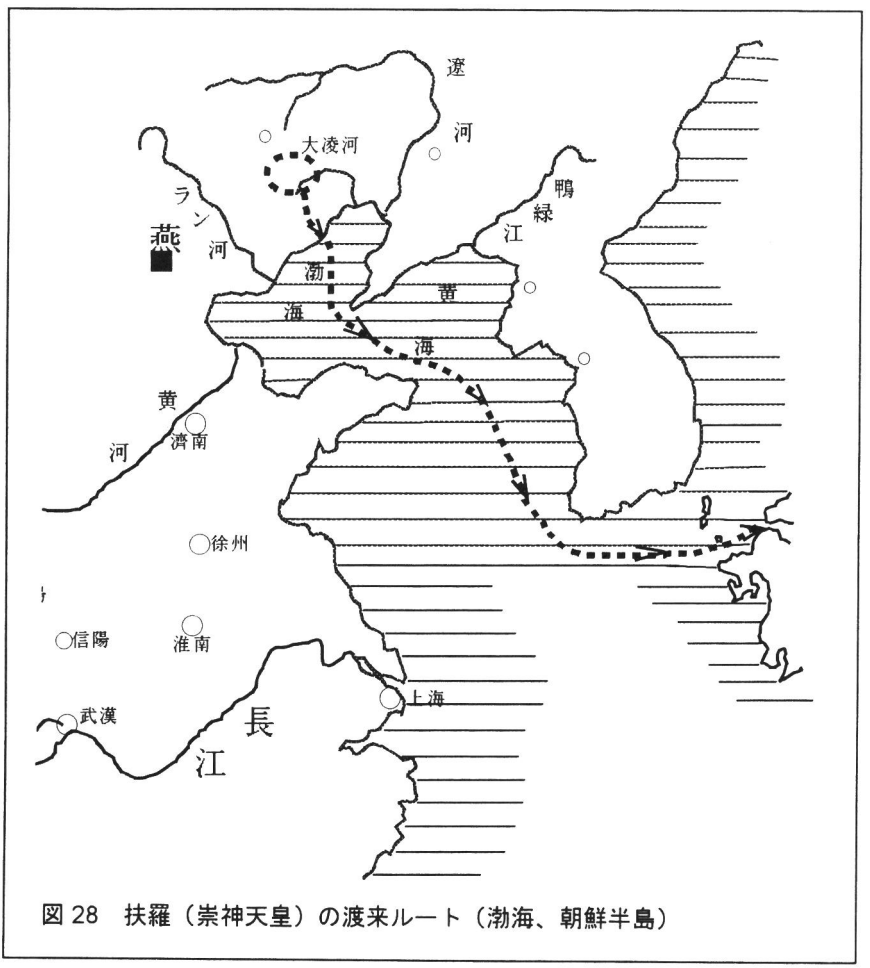


図 28　扶羅（崇神天皇）の渡来ルート（渤海、朝鮮半島）

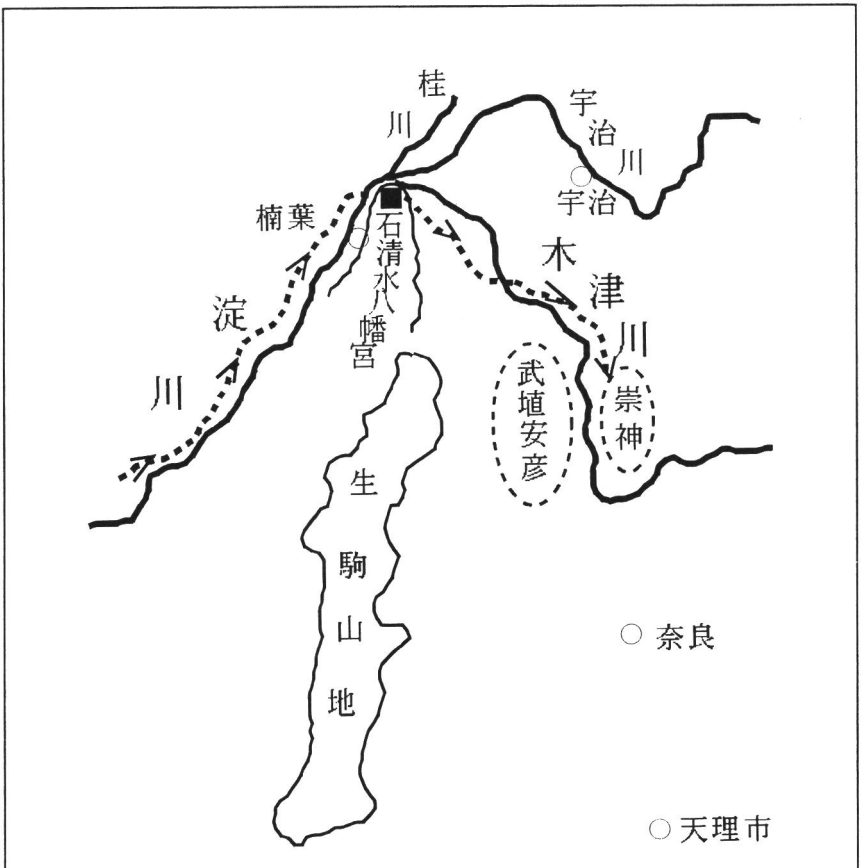


図 29　山城の椿井へ

(3) 日本列島の統一

崇神天皇は従者数千人とともに土地を開墾する。椿井大塚山古墳からは中国製の農具や工具が出土している。漁業にも力を注ぐ。椿井大塚山古墳からは漁具も出土している。古墳から漁具が出土するのは珍しいという。

力を蓄えた崇神天皇は木津川の西側の武埴安彦を伐ち、領土を奪う。これが「武埴安彦の戦い」である。

椿井大塚山古墳の墳頂からは木津川やその先の西側の地も眼下に見える。木津川一帯を支配した王の墓にふさわしい。

崇神天皇がもっとも力を注いだのは瀬戸内海ルートの確保であろう。渡来してくるときに見てきているのでその重要性はよくわかっている。崇神天皇は瀬戸内海沿岸に将軍を派遣して海上権を掌握する。吉備には吉備津彦を派遣し、九州の豊前には豊城入彦命を派遣している（詳細は後述）。

木津川一帯と瀬戸内海を手中にした崇神天皇は南の大和を平定する（後述）。その後、四道将軍を派遣して北陸・丹波・東海の地を平定する。こうして崇神天皇は「倭人を定めて王と為る」のである。

このような平定ができたのも崇神天皇が中国からの渡来人であるからであろう。強力な鮮卑と戦った経験があるし、高度な技術で作られた武具や武器がある。先住の弥生人とは比較にならない。

崇神天皇は日本列島の約半分を支配している。これだけの広い領域を支配した人物はそれまでにはいない。崇神天皇は日本列島を統一した最初の人物である。

小林行雄氏は「同笵鏡の分有関係」において、三角縁神獣鏡は大和政権が椿井大塚山古墳の首長を通して地方の首長に従属の証として与えたものであると考えた。しかし「大和政権」というものは存在しない。日本列島を統一していたのは渡来人である崇神天皇であり、三角縁神獣鏡を配布したのも椿井大塚山古墳の被葬者である崇神天皇である。